

同朋大学佛教文化研究所報

第37号

発行日 令和六年三月三十一日
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所
代表者 安藤 弥

〒四五三・八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の一

TEL (〇五二) 四一一・一三七三

FAX (〇五二) 四一一・一三六九

email: bc-institute@doho.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

二〇二四年三月十一日、岩手県大船渡市の寺院で勤められた東日本大震災の追弔法要にお参りをした。コロナ以降初めての訪問であった。コロナ前、毎年お参りしては法話をする役を仰せつかり、毎回緊張をしながらお話をしていたのを思い出す。

最初に法要でお話をしたのは二〇一三年であった。二年という年月は復興と言うにはあまりに短く、工事車両が激しく行き交い、どこも地域計画からしてこれからという時期。お参りに来られた人びとから感じるのは深い、深い慟哭であった。すくむ足で立ち、出てこない言葉を必死に探して話をした。

法要の始まる前から泣いている、小さなお子さんを連れている女性がいた。法要後も泣いたままの彼女が私に声をかけてきた。「浄土で再会するとお話ししましたがまた会えますか?」『阿弥陀経』の「俱会一处」を念頭に、私が法話でお話したことを尋ねてきたのであった。

お話をうかがうと両親を亡くしたという。遠くに住んでいて何もしてあげられなかった、毎日思い出して泣いている。そのたびにこの子が慰めてくれるのだけど、涙がとまらないと。色々お聴きし、お話をして、また来年お会いしましょうと別れた。翌年再会したが、その後はお会いしていない。しかしその方の姿が忘れられないでいる。

今年法話の場に立って胸に去来したのも十一年前のその人の姿であった。そして実感したのは、私はここに自分自身を確かめに来たかったんだということであった。私はあの人に何を伝えたのだろうか。私はあの人悲苦に出会ってどう生きてきたのだろうか。……何か違うが言葉にならない思いをあえて言葉にすればそういうことであろうか。浄土の教えに学んできたこれまでの日々を問い返す何か心が動く。私を問い返す存

十三年目の東北の地で

鶴見 晃

在がここにいる(死者も含めて)。ああ、だからここに来たかったんだと。

浄土で再会できるのか。親鸞は言う。その世界は「諸智土」、智慧の世界である。そしてその智慧の世界を仰ぎつつ、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母兄弟なり」と親鸞は人のありかたを指し示す。仏の智慧の中に人は「世々生々」に父母であり、兄弟であるのだと。

出合いも別れも繰り返す生死の一場面。そして帰る場所の一つである。それは私たちの理知がはかることができる出来事ではない。しかしその世界はなくてはならない。有無の問題ではなく、私たちの願いの場所としてなくてはならない。否、一切が縁の深い者としてあるその場所が、

私たち一人ひとりの根拠である。私たちは他者と共なるものであるから、生きる根拠は場所、世界でなければならぬ。そしてその場所の時空間ではなく、共に在ることへの願いであり、ことほぎである。父母の家が空間ではなく心であり、時を超えいつまでも安らぐ場所であるかのように、浄土は我々の願いの場所として私たちが共に生きることを支えるのである。それを經典は阿弥陀仏の本願と教えるのである。

その願いを自分の願いとして教えられ生きるとき、人は他者を見いだし、「世々生々の父母兄弟」がひとときめぐり会えたことをことほぐ。そして別離の悲しみの深さに出会いの喜びの深さが重なる。その時悲喜交流する中に亡き人は浄土の人としてよみがえる。

阿弥陀仏の本願が私の宗、すなわち生活の真実の中心となること。それが、親鸞が明らかにした浄土真宗である。このことが、私がかの地で自分自身に確かめたかったことであり、あの方と語り合いたいことであった。親鸞が自らの中に見開いた真宗は、いま私の中に、そして誰かの悲しみ苦しみの中に開かれるべくある。

《寄稿》

同朋大学、そして仏教文化研究との出会い

金山 泰志

冒頭から私事で大変恐縮ですが、二〇二三年度をもって同朋大学を退職させていただくことになりました。教職員ならびに関係者の皆様に、在職中は大変お世話になったとともに、退職に伴い様々なご迷惑をおかけすることになりました。そのような立場ですので、静かに去ろうと思っておりますが、今回このような機会を頂戴することになり、最後に改めての感謝を述べさせていただきますと思います。

私が同朋大学文学部人文学科に着任したのは、二〇一八（平成三〇年）四月でした。その前年、当時の勤務先から無期転換の問題で次年度の雇用終了が宣告され、これから先どうやって生きていこうかと頭を悩ましていました。そのような中、たまたま公募がでていた同朋大学にすがる思いで応募し、崖っぷちの所で拾っていただけになりました。

当時はまだ三十代前半で、業績も同じ専門の諸先輩方に遠く及ばないなか、なぜ自分が最終的に選ばれたのかは、選考してくださった先生方のみぞ知る所です。ただ、運やタイミングなどからむアカデミアへの就職ということを鑑みますと、「同朋大学との縁があったんだな」と改めて思います。そう思わせてくれたのが私の父親です。同朋大学に採用が決まった際、父は「これもご縁だな」と繰り返し言っておりました。父の家系が、代々浄土真宗（本願寺派）だったこともあり、息子の同朋大学への着任には《縁》を感じられずにはいられなかったとのことでした。後で聞いた話だと、私のために築地本願寺にお参りにもいっていたようです。

私は日本近現代史研究に携わる専任教員として採用されましたが、着

任とともに、仏教史への興味関心も自然と強くなりました。私の専門は、メディア史研究と対外認識研究で、具体的には近代日本人の中国に対する感情（感情レベルの中国観）の実証的把握を、近代日本の各種メディア（少年雑誌・講談・地方新聞・映画・大衆雑誌・ラジオなど）を史料に検討を行ってきました。日本人の中国観研究（大枠だと対外認識・思想史研究）は、日中関係史において重要な研究領野の一つですが、その日中関係を捉える上で、「仏教」は特に重要なのではないかと思うようになりました。例えば、一五〇〇年にわたる日中関係史を客観的に捉えようとした労作、エズラ・F・ヴォーゲルの『日中関係史』（日本経済新聞社、二〇一九年）でも、仏教の繋がりが日中関係の信頼の基礎になっていたことが指摘されていました。

以上のような問題意識のもと、同朋大学佛教文化研究所に投稿した論文が、拙稿「野依秀市の仏教雑誌『真宗の世界』とその対外観」（『同朋大学佛教文化研究所紀要』四〇号、二〇二二年三月）です。アジア太平洋戦争時の仏教界では、日本と中国を主軸にした「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の理論的根拠として「仏教」に注目が集まっていたことが、改めて読み取れました。一方、この論文で扱った仏教雑誌『真宗の世界』は、野依秀市という人物が発行した仏教雑誌（既成の教団外で発行されたもの）で、なぜわざわざマイナーと思われる仏教雑誌を扱うのか、その理由を説明するのに大分苦慮しました。以上の点を含む、研究上の意義や研究方法については、「真宗史研究会」（二〇二〇年三月）で口頭報告した際に貴重なご指摘・アドバイスを頂戴し、論文にも活かすことができました。改めて感謝申しあげる次第です。

論文では学術的な理由としてふれることができませんでしたが、『真宗の世界』という仏教雑誌に注目した最初の動機として、野依秀市という人物そのものに魅かれた、という点があげられます。平山昇さんという日本史研究者の方の言葉を借りますと、有罪判決をうけて収監されてもめげるところかそれをネタにするほどメディア露出への執念がある

「メディア人間」とも呼べる破天荒な人物で、三宅雪嶺や洪沢栄一の懐に入るなど同時代的には広く知られていた人物です（平山昇「コメント佐藤卓己会員の講演に寄せて」『メディア史研究』四九号、二〇二一年二月）。メディアを研究していた私が野依に興味を持つのは必然でしたでしょうし、彼が浄土真宗を熱心に信奉しており、その信仰活動の一環として仏教雑誌を刊行していたことが、彼の仏教雑誌とこれまでの自身の対外観研究を結びつけるきっかけとなりました。

実は、この野依に出会ったのも、同朋大学に着任したことによる縁でした。着任した年の一二月、洪沢栄一に関する研究会で活動していた大学院の先輩より連絡があり、「洪沢栄一と仏教」に関してコラム執筆をお願いできないか、とのご依頼がありました。「仏教系の大学にいるから」という理由で、研究会内で私の名前が挙がったということでしたが（仏教研究を専門とされる先生方に怒られてしまうかと思いますが）、個人的にはどんな理由であれ、共同研究のお誘いは有難いものですし、これは同朋大学からいただいたお仕事だなど大変嬉しかったことを覚えていきます。早速、研究会に参加し、洪沢栄一と仏教との関わりを探っていくことになりましたが、洪沢と仏教を結ぶ重要な人物として看過できない人物が前述の野依秀市でした。その野依との関係も踏まえた研究成果として、「コラム 洪沢栄一と仏教」（山口輝臣編著『洪沢栄一はなぜ「宗教」を支援したのか』ミネルヴァ書房、二〇二二年）を発表することができました。

同じような共同研究のお誘いとして、「仏教文化におけるメディア研究会」（代表…大正大学・森覚氏）からも原稿執筆依頼がありました。近代仏教史研究は、従来は思想史中心でしたが、近年はメディアに着目した研究が活発化しており、研究会内でメディア研究をしつつ仏教系の大学にいる私の名前が候補にあがったとのことでした。本当にありがたいことです。具体的には、「講談と仏教」というテーマでの執筆依頼で、講談に関しては以前論文を発表したことがあり、それを踏まえてのご依

頼でした。こちらの成果は「明治期の講談と仏教」として論文にまとめ、森覚・大澤絢子編『読んで観て聴く 近代日本の仏教文化』（法蔵館、二〇二四年三月）に所収されました。

最後に、私と仏教文化研究との縁を思い返す上で、安藤弥先生のご存在はなくてはならないものでした。仏教に関わる研究を勧めてくださったのも、真宗史研究会での発表の場を設けてくださったのも安藤先生です。御存知の通り、先生は戦国時代の宗教史をご専門とされていますが、三河大浜騒動など、日本近現代の仏教史にも明るく、様々なご論考から多くのことを学ばせていただきました。

また、先生の研究者としての姿勢にも大いに影響を受けました。特に印象に残っているのが、同朋大学着任直後、『日本史研究』（六六七号、二〇一八年三月）に掲載された「宗教一揆論という課題」という論文の抜刷を頂戴した時です。当時、新しい環境に慣れていなかったことや、漸く専任になれたことへの安堵から、研究活動のプライオリティが著しく落ちていました。そんな中、日本史研究者なら誰でも知っている学術雑誌において、その道の第一線で活躍しておられる様子がわかるご論考を拝見して、研究意欲が一気に湧いてきました。その後に頂戴した「戦国期宗教史研究入門」（『歴史評論』八五二号、二〇二一年四月）でも同じことを思いましたが、「この分野といったらこの人」と評価されるように、自分も日本史研究者として活動し続けたい、そう思わせてくれたのが安藤先生でした。

同じ日本史分野ということで、安藤先生だけのお名前をあげましたが、お付き合いのあった文学部の先生方は、本当に全員が全員、素晴らしい先生ばかりでした。職場環境でのストレスはほぼゼロで、おそらくこれは本当に幸運なことだったんだと思います。

その同朋大学から去ることを決めたのは自分自身です。同朋大学での感謝を胸に、新しい場所で頑張りたいと思います。ありがとうございました。

《活動報告》

アジア仏教研究会

武田 龍

・参加者 玉井 威・武田 龍・蒲池勢至・岩瀬真寿美
・開催日 5/26、6/26、7/24、9/25、10/16、
12/4、(2024年) 1/26、2/26、3/18

羅什訳『法華経』を読み進め「法師品」の途中まで来た。大乘經典に多用されるパリヤーヤ (dharmaparyāya) の役割に注意し、経の形成に留意している。

法華経の表現は激しい。自身を「経の王」(sūtra-rāja) と呼ぶ態度はどこから出てくるのであろう。法華経を讀誦・書写・受持すべきと教える。その至上主義的な態度への反発もまた強かったようだ。石を投げつけられ、棍棒で打たれるなど実際に行われたであろう迫害の様子が経中に描写される。釈尊の説法の形式を採りながら、現在進行形の表現を取り込んだ經典の制作と言える。

大乘經典は仏説を伝えるという大前提のもとに制作されている。

部派の比丘たちは、阿含経を通して仏説を学んだ。ところが釈尊説法の忠実な伝承は原始經典においても困難であった。記憶力のよい弟子たちであつても、個人の関心の違いが要点の把握を異ならせる。仏滅直後の第一結集で既にそうであつた。五百人の長老たちが承認したのは、簡にして要を得た説法の梗概要領であり、今の經典とは程遠い。直弟子の時代から時が隔たるほどに言葉の説明や解釈が必要になり、短文の經典は次第に長大化する。分別や註釈が加えられ、種々な規模の經典が成立すると整理が必要になる。記憶に便な形式による分類が行われ、九分十二分教に權威が定まる。さらに幾度も改編が重ねられた。部派の教学が熱を帯びると部派

の主張も反映する。部派は自説を主張するあまり、仏説を見失いかけたのではないか。大乘 (Mahāyāna, 「大きな乗り物」の意) を称する比丘たちが仏説の真意を求めたと考えられる。彼らは古形を保つパリヤーヤの形式を多用し、自らの仏説理解をそれに込めて世間に流布させたのであろう。

アジア仏教研究会分科会

玉井 威

月一回の開催で、従前どおり『ミリンダ王の問い』(東洋文庫) を中心テキストとして読み進めている。

前回報告と同様、仏説、仏語に見られる相互矛盾、二律背反性の問題提起と、それに対する回答といった形で議論が展開されている。例えば「死の恐怖」が主題の議論をみると、師は一方で「すべての者は刀杖を怖れ、死を恐れる」と言われているのに、また別のところでは「阿羅漢はすべての恐れを超越している」と説いているのは、相互矛盾しているのではないかと王は問う(両刀論法の問い)。これに対し、対論者の長老は「前者においては、阿羅漢は除外されている。なぜなら恐怖の原因が取り除かれているから」と答え、後者は「煩惱あるもの、極端に自我の見解にとらわれているもの、苦楽に浮き沈みしているもの」に関して言われたのだと回答している。

このあと比喩を交えての説明が続くが、興味深いのは、語(仏語)についての四句分別(テトラレンマ)が展開されていることである。「(1) 語には表現も意味も不完全なもの、(2) 表現は不完全だが意味は完全なもの、(3) 表現は完全だが意味は不完全なもの、(4) 表現も意味も完全なもの」があるといい、それぞれに従って意味が受け取られるべきであるという。これは、大乘仏教等で行われる了義、未了義という教相判釈の先駆的なものと言えよう。また、意味は(1)(經典からの)

引用句、(2) 意味内容、(3) 師伝、(4) (自分の) 意趣、(5) 根拠の妥当性のこれら五つの根拠によって認められるべきだという。仏語、仏説をどう理解すべきか、あるいはその正当性の判断根拠がどこにあるかが、ここに示されていて興味深い。

真宗史研究会

安藤 弥

今年度は次のとおり、二回の研究会を実施した。

・第一回目 (通算第四八回)

【日時】七月十四日 (金) 一五時四五分～一七時一五分

【報告者】下村優佳氏

【題目】「真宗における先徳連坐像の依用およびその伝播」

・第二回目 (通算第四九回)

【日時】二〇二四年二月五日 (月) 一四時～一六時半

【報告者】遠藤美保子氏

【題目】「光善寺准勝と『御伝鈔』の成立」

下村氏は大谷大学大学院博士後期課程に在学し真宗史研究に取り組む新進気鋭の研究者である。報告では初期真宗の法宝物を概観した上で、とくにいわゆる「高僧連坐影像」に焦点を当てた。とりわけ北陸方面に伝存する事例を検討し、専信房専海とその周辺について考察を提示した。

なお、同日には「初期真宗研究会」も開催し、同朋大学仏教文化研究所編『親鸞・初期真宗門流の研究』(法蔵館、二〇二三年三月)の刊行後研究会も実施した。

遠藤氏の報告は、研究所がかつて調査した光善寺(真宗大谷派・大阪府枚方市)ご所蔵の史料を用いたものであった。江戸時代初期の同寺歴

代である准勝の、とくに東西分派と相伝に関わる動向を追ひ、また同寺所蔵のいわゆる『御伝鈔』とその周辺状況についての検討を提示した。両回とも多数の参加を得て、闊達な議論が行われた。次年度も引き続き、二回程度の研究会の実施を予定するが、記念すべき開催五〇回目を迎えることから、特別研究会の実施、また研究会の今後の展望について考える機会を設けたいと考えている。

「東アジア仏教思想史」研究会

市野 智行

・開催日 8/29、3/26、ほかに打ち合わせなど

・参加者 市野智行、織田顕祐、藤村潔、川口淳、黒田浩明

本年度は、二〇二一年度より開催してきた曇鸞『浄土論註』の研究会の集大成として、『曇鸞『浄土論註』の新研究―真宗理解の再構築のために―』(以下本書)と題する研究論集を刊行することを目標として活動してきた。

本書の主たる課題は「回向」にある。大乘仏教思想史の中で「回向」はどのような思想的変遷を有し、また曇鸞は回向をどう理解していたのか。またその曇鸞に帰着する回向の理解が親鸞や近代の仏教者にどう影響を与えたのか。さらには親鸞当時の『浄土論註』の流布状況など、多様な論点を共有しつつ、改めて『浄土論註』を読み直し、メンバー各自が論文にまとめたものである。

本年度はこれまでの研究会の成果を生かしつつ、論考執筆とその打ち合わせを重ねた。年度内に法蔵館より本書を刊行する予定である。また本書の刊行に際して、大学より出版助成を頂いた。ここに記して謝意を表する。

「近代戦争下の学術調査と人的交流」研究会

藤井由紀子

・参加者 藤井由紀子、川口淳、中川剛、日比野洋文、花栄

昨年度の報告で述べたように、新型コロナウイルスによる環境変化を鑑みて、本研究会では活動の主軸である西藏寺蔵「小川貫式資料」に基づき、「コロナ禍下での資料共有方法の構築」というテーマを掲げてきたが、本年度はこれまであまり考慮してこなかった喇嘛教という新視座を入れ、上記資料の歴史的価値づけについての見直しを行った。

就中、上記資料のなかで高いウエイトを占める山西省五台山関連の資料については、有力喇嘛僧の動向を考慮に入れて、大幅な再考を試みた。日中戦争勃発後、日本軍のバックアップを得て、内蒙古の政治家徳王が自治政権を立ち上げる動きをみせるなど、満州・蒙古・中国では蒙古民族と彼らの信仰する喇嘛教の扱いが統治上の重要課題となり、喇嘛僧を政治利用するための喇嘛教工作が仏教学者・仏教者によって進められていた。チベットを中心とした世界から喇嘛教を切り離し、日本を中心とした大東亜の新世界のなかにこれを位置付けるといって、広く大陸全体で展開された喇嘛教工作の動きのなかで、五台山資料を改めて読み解く必要性に強く迫られた結果である。

なお、以上の調査活動の内容は、すでに一部資料を公開している画像データベース「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト—興亜留学生小川貫式の記録—」(<https://sites.google.com/view/doho-bukken-ogawadocuments>)のなかに、逐次盛り込んでいく予定である。

「日本仏教の成立と展開」研究会

(活動継続中)

「教行信証」学習会

吉田 暁正

・講師 森村 森鳳 先生
・趣旨 漢文として『教行信証』を読む

・会場 同朋学園D・プラザ閣蔵2F 多目的会議室

・テキスト 東本願寺出版『真宗聖典』(必要に応じて資料配付有)

・開催日 5/25、6/22、7/27、9/21、11/30、

(2024年) 1/25、2/15

『教行信証』の読解において、これまでの研究を踏まえつつ、親鸞が言葉の中に込めたメッセージを確かめるように学習を進めている。特に、親鸞の言語表現、文字への厳密さに注目して読むこと、また、その表現の中に込められている重層的な意味を読み取ることを意識しながら読解を進めている。

昨年度に続き、「信巻」における「八番問答」について学習を進めた。問答全体の構造を繰り返し確認しながら読み進めている。その中で、第四番問答は八番問答の踊り場であり、謗法が自らの問題として問われる形で次の第五番問答へと展開されていることを確かめた。そして第五番問答では、五逆は謗法から生じるといことが問いとなり、この五逆以降では謗法を含んだ五逆が課題として展開されてくる。そして第六番問答は全体の核心となつて、第十八願の「唯除」の問題に込めていく構造となつている。「信巻」において『論註』の八番問答を引用された親鸞の意図を確かめながら読み進めていきたい。

「宗教史料の保存と活用」研究会

千枝 大志

今年度より、本研究所内に「宗教史料の保存と活用」研究会」と銘打った新たな研究会を立ち上げることにした。その名の通り、本会は〈宗教史料〉と概念化した〈歴史資料〉をいかに保存し、そしてそれを活用するかを実践的に研究する会であり、発起人の千枝が代表を務めている。

そもそも、本研究所枠での開催となれば、歴史資料の保存と活用、すなわちアーカイブズ的な内容の研究会であれば、〈真宗史料〉や〈仏教史料〉等と〈仏教文化〉関連の名称を冠した方がよいのではないかとみる向きもあろう。しかしあえて、そうしなかったのは、私がいわば〈神道史料〉を活用し、〈社会経済史〉を研究してきたという要素もあるが、神仏習合や神仏分離といった神仏交渉史的背景等を考慮した場合、〈仏教史料〉等に絞らない観点が必要であると考えたからである。このように、各宗教での教学史等に限定されない研究面での活用が見込まれる一方で、従来は内的分野では活用されることのなかった非〈宗教史料〉を発掘することで新たな研究が生まれる可能性がある。しかし、無限の可能性を秘める〈宗教史料〉はその難解さ故か、保存と活用の側面で軽視されている現状があるといっても過言ではない。そこで本会では、〈仏教史料〉を含む様々な〈宗教史料〉を取り上げ、その保存と活用をめぐる諸問題を広く取り扱いたいと考えている。

本年度は、本研究所に寄託中の名古屋飯田町（現愛知県名古屋市中東区泉）の真宗大谷派寺院・養念寺に伝来する『養念寺文書』を素材にその問題について検討したが、その詳細は最新号の『同朋大学仏教文化研究所紀要』掲載の特別調査報告を参照されたい。

◎現地で学ぶセミナー（11／26）

本年度は「伊勢国の仏教文化と街道文化―三重の街道をゆく―」と題し、千枝大志客員所員を講師として開催した。二〇二〇～二二年の三年間は新型コロナウイルスにより中止していたが、四年ぶりに再開することができた。参加者は三二名となり、盛況であった。

午前中は三重県津市一身田町にある真宗高田派本山専修寺を中心に見学をした。専修寺職員の松山暁彦氏に境内を案内していただき、普段は立ち入ることのできない庭園も拝観することができた。続いて門外に出て寺内町を散策し、ここではボランティアスタッフの皆様から丁寧な案内をいただいた。昼食は専修寺境内にある高田会館和彩あかりでいただき、心地よいひと休みの時間を過ごした。

午後からはまず松阪市の松浦武四郎記念館に向かった。松浦武四郎は北海道名づけの親として有名な冒険家である。当記念館では郷土の偉人として重要な資料を多数収蔵し、またその偉業を伝えている。記念館では館長の山本命氏に解説していただきながら、武四郎の生涯について学んだ。そして普段は公開されていない「現如上人錦絵」についても特別に見せていただき、さらに学びを深めることができた。

最後に伊勢市の伊勢河崎商人館へ向かい、千枝講師の案内のもと街並みを見学した。河崎は東西流通の盛んな勢田川沿いに位置する流通都市として栄えた町であり、商人館は一九世紀に活躍した名望家小川家の邸宅をリノベーションした地域資料館的施設である。地域住民の方から厚い信頼を寄せられる千枝講師の姿に心温められながら、当地の歴史について思索を深めることができた。

以上のように充実した見学会を実施することができた。終了後のアンケートではおおむね好評をいただき、次回の見学会希望先の意見としては奈良県や滋賀県などが挙げられていた。

（文責 老泉 量）

二〇二三年度彙報

《研究所構成員》

所 長 安藤 弥
所 員 箕浦尚美（人文学科） 岩瀬真寿美（社会福祉学科）
北島信子（社会福祉学科）

所員・幹事 市野智行（仏教学科）

研究顧問 小山正文 小島恵昭 蒲池勢至 玉井 威

所員（非常勤） 川口 淳 老泉 量

客員所員 青木 馨 飯田真宏 上島 享 塩谷菊美 大山誠一

大艸啓 岡村喜史 花 栄 北畠知量 木全琢磨

ギヤナ・ラトナ 黒田龍二 嘉木揚凱朝 脊古真哉

曾根原理 新野和暢 武田 龍 千枝大志 服部 仁

藤井由紀子 藤村潔 ブレニナ・ユリア 松金直美

松山大 吉田暁正 吉田一彦

川村伸寛 周 夏 高木祐紀 中川 剛 日比野洋文

客員研究員 特別研究員 小谷峻示

《所員会議》

4 / 17、5 / 15、6 / 19、7 / 10、9 / 19、10 / 24、
11 / 20、12 / 11
(2024年) 1 / 22

《公開講座等》

現地で学ぶセミナー
テーマ「伊勢国の仏教文化と街道文化
——三重の街道をゆく——」

担 当 千枝大志（客員所員）

開催日 11 / 26（土）

《ギャラリー史料展示》（会場 DOプラザ閣蔵一階ギャラリーDO）

・前期（7 / 7～7 / 18）*三展示同時開催

①テーマ「書画に宿る近代日本人の信仰——真宗と思想界の交流——」

担 当 川口 淳（所員）

②テーマ「徳川創業史料の世界」

担 当 安藤 弥（所長）

③大河ドラマ「どうする家康」パネル展示（NHK名古屋放送局）

・後期（11 / 21～11 / 30）

テーマ「親鸞・初期真宗門流の世界——真宗大谷派宗祖親鸞聖人御誕生
八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要記念——」

担 当 安藤 弥（所長）

《史料調査活動》真宗寺院史料調査（※は学生も参加）

5 / 3・9 / 1 行順寺（真宗大谷派・三重県いなべ市）※

5 / 8 一乗寺（真宗興正派・愛知県額田郡幸田町）

5 / 12・5 / 14 本誓寺（真宗大谷派・岩手県盛岡市）

6 / 16 無量壽寺（真宗大谷派・愛知県半田市）

7 / 28 照源寺（真宗大谷派・愛知県岡崎市）

8 / 23・8 / 24 願船寺（真宗大谷派・茨城県那珂郡）

9 / 14・3 / 12 名古屋別院（真宗大谷派・愛知県名古屋市）※

3 / 19 蓮光寺（真宗大谷派・愛知県津島市）※

・寄託史料の整理調査（養念寺）

《特別活動》

・研究所所蔵フィルム史料デジタル化作業、アーカイブズ関連実習、学
芸員課程履修生の古文書学習会、調査活動への参加

・同朋大学仏教文化研究所編『親鸞・初期真宗門流の研究』（法蔵館、

二〇二三年三月）刊行